

## ドイツ語における時制意味分析試論 (II)

——過去形、または物語ることについて (その1)——

湯 浅 英 男

## 目 次

- 0. 序
- 1. 過去形の本質
  - 1.1. 現在完了形との一般的な意味論的区分
  - 1.2. 過去形：目撃した出来事を語る時制
  - 1.3. 過去形：回想という話者の „modus“ を担う時制
- 2. 物語る行為
  - 2.1. 物語る行為と時間・語り手・世界
  - 2.2. 物語る行為と過去形の意味 (以上、本号)
- 3. 物語の虚構性と過去形
- 4. 発話の戦略としての過去形
- 5. 結び

## 0. 序

本誌20号の試論 (I) (1981) において、われわれはドイツ語の時制を、文が意味論上もつ2つの側面、すなわち事的な命題の側面である dictum と話者の主観的陳述の側面である modus のうち、後者の言表における統語論上の外化として捉える視点を呈示したつもりである。そこで本稿においてはとくに過去形を取り上げ、それが使用されるコンテキストから、過去形が担う話者の modus とそれが現実世界の中で具現化された場合の言語行為の諸特性を探ることを中心に、過去形をめぐる様々な問題の解決を試みてみたい。第1章では、従来の過去形の意味についての諸説を検討しつつ、実際を目撃者が過去形を使用するという事実を手懸りに、この時制が担う話者の modus について考える。そして第2章では、過去形の使用と「物語る」という言語行為との密接な関係を明らかにする。さらに第3章においては、K. Hamburger 以来の物語の虚構性と過去形の関係について、第1章・第2章の議論をふまえながらわれわれなりの解釈

を試み、第4章においては、コミュニケーションの場において果たすことが可能な過去形のような戦略的役割を少しでも照射できればと思っている。また、本稿では過去形と現在完了形との意味論的対比を随時行なうことになる。

1. 過去形の本質

1.1. 現在完了形との一般的な意味論的区分

過去形について考える時、必ずといっていいほど現在完了形との用法上の差異が問題とされる。すなわち発話時以前の出来事を表現する際、いつ過去形が用いられ、いつ現在完了形が用いられるのか、あるいはどちらの時制を用いるかは全く話し手の恣意にゆだねられているのかという問題である。そしてこのことは、ドイツ語教授法においても決して軽視できない今なお完全には解決されていない問題である。この節では、Latzel がまとめた過去形と現在完了形の用法の4つの対立 (Latzel, S. 208) を考察することによって、従来の過去形 (と同時に現在完了形) の解釈上の問題点を概観してみたい。まず、4つの対立を簡略化した形で表にまとめてみる (以下、表に付した番号はすべて筆者による便宜的なものである)<sup>1)</sup>。

	過 去 形	現 在 完 了 形
[1]	書きことばで	話しことばで
[2]	非完結 (Nicht-Abgeschlossenheit) の 観点で	完結の観点で
[3]	物語りながら (erzählend)	論評しながら (besprechend)
[4]	過去の観察者の地点から (aus einer vergangenen Betrachter- position)	現在 (Gegenwart) の観察者の地点 から
	…の過去の再現 (Wiedergabe von Vergangenem)	

Latzel 自身はこのような対立について次のように述べている。「これらの区別は、すべてが全くの誤りであるというのではないが (nicht total falsch), 完全に正しいというわけでもない (nicht vollkommen richtig)。当然最も大まかなもの (am gröbsten) である最初の“補助”説明 (“Hilfs”-Erklärung) を度外視すれば、残りの説明については1つの説明が他の説明から派生しうるもの (ab-

leitbar) であり、それらはお互いにただニュアンス (Nuancen) (一部は確かに重要なものであるが) において異なっているにすぎないといえる。」(Ebd.) 完全に誤りでもなく、また正しくもないという Latzel の見解にたとえ同意するとしても、ここではもう少し具体的にコメントしておく必要がある。

[1] の対立は、たとえばドイツの新聞・雑誌の類を読めば現在完了形が過去形と共に過去の表現に用いられていることが容易に確認できるため、決して本質的な対立とはなりえず、Latzel の言うように補助説明にすぎない。また [2] の完結 (Abgeschlossenheit) の概念について言えば、運用的な側面からよりもむしろ „haben/sein の現在形+過去分詞“ という現在完了形の形式から導き出されたものであろう。われわれもかつて完了不定詞の形式に対し „VOLL-ZOGEN+KOPULA“ という意味論的メルクマールを設定したことがある (拙論 1981, S. 64)。そこであえて „abgeschlossen (完結した)“ という語を避けたのは、もともと完結という概念を発話の状況に照らして考えた場合、かなりあいまいな印象を受けるからである。たとえば、

a) Er ging nach Hause (彼は家へ帰った)

b) Er ist nach Hause gegangen (同上)

を比べた場合、表現される行為自体の完結性は a) b) 双方が共にもっていると行ってよい。しかし、b) の現在完了形の表現は「彼が今ここにいない」という現在(発話時)の状況との関連性を強く意識させるために、a) の過去形の表現の方がむしろ現在と遮断されているという意味での完結性をもっているといえる。そのことを Weinrich は的確に述べている。「われわれは次のようにも言うことができる。すなわち現在完了形 (Perfekt) においては、過去 (Vergangenheit) は完了したもの (perfectum) としてではなく、未完了なもの (imperfectum) として現われる。(過去形 Imperfekt) においては、過去は完了したもの (perfectum) として現われる。)(Weinrich, S. 65, 脇阪他訳, S. 84も参照。本稿においてはすべて拙訳を用いた。) Weinrich の言葉からもわかるように、現在完了形 (Perfekt) と過去形 (Imperfekt, Präteritum) の意味論上の対立を、ラテン語派生の名称が示す通り単純に Perfekt=abgeschlossen, Imperfekt=nicht-abgeschlossen と対応させて考えることは危険である。残る [3] [4] の意味論的区

分は、過去形にとって(当然、現在完了形にとっても)〔1〕〔2〕よりもより本質的なものに思われるし、また Latzel も暗示しているように〔3〕〔4〕はとりわけ相互に切り離して論ずることはできない。この2つに関してとくに問題にしたい点を挙げておくならば、〔3〕に関しては「物語る (erzählen)」とは一体どういう言語行為なのか、〔4〕に関しては観察者の過去の位置と発話者の Hier-Jetzt の位置との意味論上の関連はどうなっているのかということである。そしてこれらの解決は本稿(とりわけ第1章・第2章)の主要な目的であると言ってよい。第1章においては以下過去形が担う話者の心的態度(つまり *modus*)を、それが使用される具体的状況を手懸りにして探ることにする。

## 1.2. 過去形：目撃した出来事を語る時制

過去形の本質を明らかにしていく際われわれが最も注目したいのは、出来事の生起する現場を目撃した人が後日その状況を語る時に、多くの場合過去形を用いるという事実である。Curme はこのことを現在完了形と比較させて次のように述べている。「また当然のことながら、出来事を目撃者 (an eye-witness of events) が出来事を、それらが生起するのを見た通りに相互に関連させて (in their relations to each other) 物語る (narrating) 時、過去形を用いる。そして自らの心の中に出来事全体の完全な像 (a complete picture of the whole occurrence) が存在している時には、たとえ一文であってもこの時制を用いてもよいのである。Gestern ertrank ein Kind (昨日一人の子供がおぼれた)。Sie waren gestern in der Oper (彼らは昨日オペラに行った)。他方、ただ聞いただけの人が第三者にこれらの出来事を伝達する時には、話し手にとって出来事は単に独立した事実 (independent facts) にすぎないので現在完了形を使用する。Gestern ist ein Kind ertrunken. Sie sind gestern in der Oper gewesen. (同上)」(Curme, S.213) こうした Curme と同じような説明は Wilmanns (S.189) においても見られる。今この2人の説明を基に「発話行為者の区別」(=[5])と「発話行為の仕方・様態」(=[6])の観点から両時制の用法をまとめると次のようになる。

	過 去 形	現 在 完 了 形
〔5〕	現場にいわせた目撃者 (Augenzeuge) が,	現場にいわせず人づてに聞いた第三者が,
〔6〕	過去の出来事をその当時の他の出来事あるいは他の状況との関連の中で物語る時使用。	過去の出来事を「独立した意味をもつ事実 (Faktum von selbständiger Bedeutung)」(Wilmanns, S. 189) として伝達する時使用。

〔5〕は言うまでもなく絶対的な基準ではありえない。たとえば歴史的叙述には多く過去形が用いられるが、一般的に言って書き手自身が叙述されたすべての出来事を直接体験することは不可能なことである。他方1人称を主語とする現在完了形の文の存在——たとえば *Ich habe gestern die Stadt besichtigt* (私は昨日その町を見物した)——は、話者が必ずしも第三者的立場ばかりでなく、出来事の当事者の場合もあることを示している。しかし、〔5〕の基準はこうしたことを考慮した上でもなお Latzel の表における〔4〕の基準を考える上で重要であるし、また〔6〕の基準についても Latzel の表の〔3〕の基準と密接に関係していると思われる。過去形が担う心的態度の側面である〔3〕〔4〕を検証するためにも、〔5〕〔6〕といったより客観的・具体的に捉えることができる言語運用の側面を直接の手懸りとしておくことが必要である。

そこでまず、出来事を目撃した人が使う過去形の実際を知るために、Latzel の用例からそれにあてはまるものを紹介するとともに、それに対する Latzel 自身の見解も示してわれわれの解釈の足場を築きたい (以下、例においては日本語訳を略す)<sup>2)</sup>。

#### 例 1

K=警部 (Kommissar), P=ペーター (Peter)

K: Nun erzähl mal, wie das alles war.

P: Ja, das war so: (...) Aber wer kam? Nicht Frau Scheller, wie ich dachte, sondern ein fremder Mann. Er hatte schwarze Handschuhe an. Er ging auf den Zehen, sah schnell nach rechts und links, öffnete dann den Schrank und durchsuchte hastig jedes Fach. Dann zog er

nacheinander alle Schubladen des Sekretärs heraus. In der untersten fand er eine Kasette. Er brach sie mit einem Stemmeisen auf und nahm Schmuckstücke heraus. Dann sah er sich rasch noch einmal um, ging aus dem Zimmer und verließ kurze Zeit danach die Wohnung. (Latzel, S.211)

## 例 2

R = 裁判官 (Richter), Z = 女性の証人 (Zeugin)

R: Nun, Frau Meier, wie war das also?

Z: Also ich stand an jenem Tage, es war am Nachmittag gegen drei, am Fenster und sah auf die Straße hinab. Da sah ich den Koltz und noch zwei andere die Straße herabkommen. Der Koltz hatte ein Gewehr in der Hand. Als sie so etwa beim Gasthaus Schilke waren, kam der Polizist Hofer aus der Seitenstraße. Der Koltz legte sofort an und schoß. Der Polizist brach zusammen und die anderen liefen weg.

R: Gut, Frau Meier, ich fasse noch einmal zusammen. Sie haben also am 22.6. gegen 3 Uhr am Fenster gestanden und auf die Straße hinabgesehen. Sie haben die Angeklagten die Straße herabkommen sehen. Der Angeklagte Koltz hatte ein Gewehr in der Hand. Der Polizist Hofer ist aus der Seitenstraße gekommen. Der Angeklagte Koltz hat sofort auf ihn geschossen. Der Polizist ist zusammengebrochen und die drei sind davongelaufen. Ist das richtig?

Z: Ja.

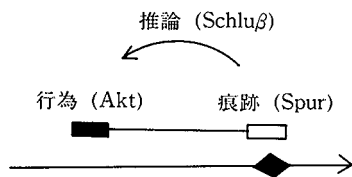
R: Gut, dann können wir mit der weiteren Zeugenvernehmung fortfahren. Ich danke Ihnen, Frau Meier. (Ebd., S.216)

まず例 1 について Latzel 自身の時制解釈を紹介したい。はじめにテキストの背景を簡単に述べておくことにする。

ペーター少年は家に一人で留守番をさせられ退屈している。そこでペーター

は、休暇で家を空けている階上のシェラー女史の住まいに自宅に預けられていたかぎを使って入る。だが彼がシェラー女史の居間に入った時、物音がし、誰かがドアを開けて侵入してきた。そこですばやくカーテンの後ろに隠れる。入ってきたのはシェラー女史ではなく泥棒であった。その男はタンスの中などを荒らしまわって帰って行ったが、ペーターは他人の住居にいたことがわかってしまう心配のため、両親にはその出来事について何も話さなかった。しかし翌日母親が事件の現場を偶然発見し、刑事を呼んだ。刑事たちは錠がこじあげられていないことから、合いかぎを所有することができ、しかも彼女が留守であることを知っていた知人の仕業ではないかと疑う。そこでペーターは不安になって父親にすべてを話し、刑事に再び来てもらう。その時にペーターと刑事がかわした会話が例1なのである。

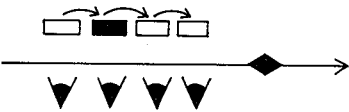
以上のようなコンテキストをもつ例1に対し、Latzel が現在完了形と過去形を対照させながらおこなった解釈は以下のように要約できる (Latzel, S. 211 f.)。まず刑事たちは、現場の状況から、Der Einbrecher hat das Zimmer durchsucht. Er hat die Schubladen herausgerissen. Er hat die Kassette aufgebrochen. (泥棒は部屋をくまなく捜した。彼は引き出しを抜きとった。彼は手さげ金庫をこじあげた。) と現在完了形を使って過去の出来事を述べるが、それは荒ら捜しの跡をまさに今、見ているからできる判断なのである。「つまり、今、刑事たちは 痕跡 (Spuren) を見て (s e h e n), そして行為 (Handlungen) を推論するのである。」このことを Latzel は次のように図示する (図1. ◆ は発話時を示す)。



(図1)

他方、ペーターは、Der Einbrecher durchsuchte das Zimmer. Er riß die Schubladen heraus. Er brach die Kassette auf. (同上) のように過去形を

使用する（このような過去形の使用は例1をみても明らかである）。しかし、なぜペーターが過去の出来事や事態を発話時において知っているのかといえば、それは当然のことではあるが「彼が目撃者 (Augenzeuge) だった」からであり、「彼がそれを見ていた (sah)」からである。「ペーターの目は一秒一秒 (von Sekunde zu Sekunde) 出来事自体の経過を追跡することができたのである。」この説明に付されている図は以下のようなものである（図2. ▼ は観察行為を示す）。

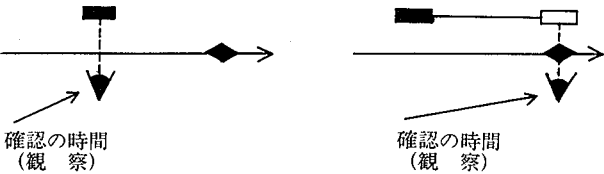


(図2)

Latzel は以上のことをまとめて次のように公式化している。

〔7〕	過去のことを現在の痕跡と関連させて再現する→現在完了形
	過去のことを（一步一步）目撃者の地点から再現する→過去形

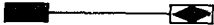
また、このことは過去の出来事の確認の時間 (Zeit der Feststellung) が、過去形では過去であるのに対し、現在完了形では現在であるとも言える。Latzel は以下のように図示している（図3）。

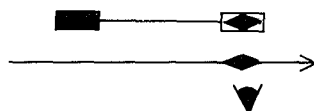


(図3)

例1についてはそれぐらいにして、今度は例2について彼の解釈を要約しておく (Latzel, S. 216 f.). 例2は法廷での対話であり、現在完了形の用法について言えば、「発話時において与えられた後の事態 (Nachzuständliche) が、他人の発話 (eine fremde Äußerung) でもありうるということが示されているテキスト



ト」である。この場面では、まず事件を実際に目撃した証人がそれを過去形で語る。それに対し裁判官は、目撃者の報告に基づいて現在完了形で当の事件を要約しており、いわば「伝え聞きの再現 (Hörensagen-Wiedergabe)」を行なっている<sup>3)</sup>。したがって裁判官の現在完了形の文に対しては、Aufgrund Ihrer vorliegenden Aussage kann ich also feststellen:… (あなたの今の証言に基づいて私は次のことを確認できます) という上位文 (Obersatz) が考えられる。さらに、「裁判官の文 (Sätze) はそれ自体で (für sich) 孤立して存在しており、一文一文 (Satz für Satz) 女性の証人が異議を唱えないことによって肯定していることになる質問文 (Fragesätze) なのである」。そして時間的關係として次の図を呈示している (図 4.  は伝達を示す)。



(図 4)

### 1.3. 過去形：回想という話者の „modus“ を担う時制

以上、実際を目撃者が用いる過去形の例をいくつか示すと同時に、Latzel 自身の過去形 (と共に現在完了形) についての意味解釈を概観したが、およそ過去形がどのような立場の話者によって、どのような態度で使用されるかを現在完了形と対比した形で知ることができたと思う。そこでこの節ではそれらのことを手懸りに、過去形を使用する話し手 (あるいは書き手) の心理的な態度・様態 (つまり modus) を探してみたい。まず先に述べた Latzel の解釈——これはかなり一般的な解釈であると思う——を批判検討することから始める。過去形の検討に入る前に、彼の現在完了形の解釈についても一考しておきたい。

現在完了形についての彼の考えの要点は、過去の出来事・行為に言及する際、発話時に存在している「痕跡」あるいは「後の事態 (Nachzustand)」を根拠としている時には現在完了形を用いるということである。たとえば、例 1 では泥棒が荒らした後の部屋の状態が、例 2 では女性の証人の発話自体が、過去の出来事の「痕跡」となる。しかし、実際に過去の出来事を目撃していない第三者

The diagram shows two spatial-temporal frames. On the left, labeled "[Dort-Damals の時空]" (Spatial-Temporal Frame of There-Then), there are several 'X' marks representing "過去の出来事" (Past Events). An arrow labeled "(反応)" (Reaction) points from these events to a circle on the right. The circle is labeled "Hier-Jetzt の時空" (Spatial-Temporal Frame of Here-Now) and contains the text "現在において有効な事態 (刺激)" (Situation effective in the present (stimulus)).

そこで、今度は本稿のテーマである過去形について Latzel の説明をみてみよう。たとえば図 2 あるいは基準の〔7〕からわかるように、彼によれば過去形は、過去の出来事を自らが目撃したとおりに、ひとつひとつ再現する際に用いられる時制である。だが、一般的に一文(厳密に言えば、ひとつの動詞)だけでは

出来事の継起性を表現することは不可能である。したがって、Latzel の解釈は「物語る (erzählen)」という連続的な言語行為を除外しては考えられない。つまり図2の観察行為 (Beobachtungs-Akt) の継起性は、Hier-Jetzt における「物語る」という発話行為の継起性の内に還元され、さらに観察行為や「確認の時間」(図3)の発話時に対する客観的時間関係も、同じく Hier-Jetzt における話者の心的態度・様態 (つまり *modus*) の中に内包されるとみるべきであろう。Latzel の説明には物語る行為自体や、それを支える話者の *modus* についての考察が不足している。前者については主に次章に譲り、ここでは後者の問題を中心に考えてみたい。

われわれはすでに拙論 (1981, S. 67) で、過去形および過去完了形が担う *modus* を Brinkmann に依拠して „ICH ERINNERE MICH (私は回想する)“ として把握しておいたが、たとえば細江逸記博士も過去形を「回想叙述」(細江, S. 115) の語形と断定している。しかし細江博士の場合、トルコ語にあり古代英語や現代ドイツ語にも残る語形の区別を、「目睹回想」(事実を目撃し確信して述べる場合) および「伝聞回想」(他からの伝聞にすぎない場合) と名づけていることから、「回想」という言葉自体は話者の直接体験を必要としていない(細江, S. 119)。しかし日本語でも「回想する」(あるいは他にも「思い出す」・「追憶する」・「想起する」等) と言う場合には自らの直接的な体験を前提とするように、われわれが用いる „ICH ERINNERE MICH“ あるいは „Erinnerung“ (これを一応「私は回想する」あるいは「回想」と訳しているが、「回想」の代わりに「想起」、「記憶」という訳語をあてることもできるであろう) という心的様態には話者の直接的な目撃・体験は必要不可欠である。また、われわれは例1・2のような目撃者が用いる過去形を、単に過去形の派生的な一用法としてではなく、他の用法 (たとえば歴史的叙述や虚構的な物語等) もすべてそこを出発点として解釈することが可能な、最も本質的な用法として理解する。したがって、そうしたコンテクストで用いられる場合の過去形が担う心的様態 (すなわち *modus*)こそ過去形の本義であると考え、また、それを「回想」という言葉が最も的確に表わしているように思われる。

それでは「回想」とはいかなる性格をもつのであろうか。Brinkmann は次

のように述べる。「過去形で表現される過去 (Vergangenheit) は現在 (Gegenwart) からは切り離されて (abgehoben) いる。また時間の継続性 (Kontinuum) は中断されている。過去形の根底にある回想は、この中断 (Unterbrechung) を前提とする。」さらに彼は「かつて (Einst) と今 (Jetzt) の間の隔たり (Abstand) の意識は明らかである」と述べ、過去形のもつこの隔たりを「回想の切れ目 (Erinnerungsschnitt)」と呼んでいる (Brinkmann, S. 334)<sup>4)</sup>。われわれは回想とはまさにこの「回想の切れ目」を飛び越え、言語主体の存在する Hier-Jetzt の時空から Dort-Damals の時空へと心理的な移行を果たすことだと考える。すなわち、

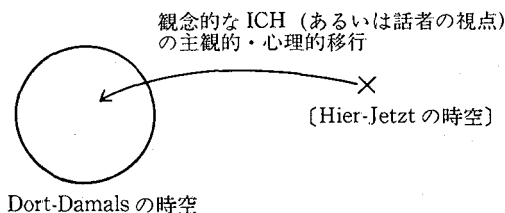
#### 主観的・心理的移行

#### JETZT-ICH → DAMALS-ICH

が過去形の担う回想の本質である。また、これを話者の視点の移行と捉えてもよいであろう。ただ注意すべきは、上で示された JETZT と DAMALS の間の距離は客観的時間によって測定可能なものではなく、主観的・心理的隔たりにすぎないということである。『魔の山』(トーマス・マン) の「まえがき」の中で、1人称の語り手がハンス・カストルプの話について、「この物語のふけようは日数からは計算できないし、その年齢は地球の公転の回数で数えることができないのである」と述べ、さらに「一言でいうと、この話の過去の度合は、ほんとうは時間とは関係がないのである」とまで極言しているが、このことは「ふかいふかい過去の時称 (Zeitform der tiefsten Vergangenheit)」——すでに „tief“ という形容詞が、過去という時間が主観的なものであることを暗示している——である過去形の内包する JETZT-ICH → DAMALS-ICH の距離についてもあてはまることである (関・望月訳 (一), S. 23)。

現在完了形と対比させる意味で、以上のことを図6にまとめてみた(話者にとっては、すでに発話時において Hier-Jetzt の時空は意味を失うので、〔 〕に入れた)。

図5・6を対比させて両時制の本質を端的に(また心理的に)定義すれば、現在完了形が過去の出来事を1つの事実として現在へとつかみ取ってくる時制



(図6)

であるのに対し、過去形の方は逆に話者の意識（あるいは視点）を Hier-Jetzt の時空から Dort-Damals の時空へと移行させると言うてよいであろう。

## 2. 物語る行為

### 2.1. 物語る行為と時間・語り手・世界

「過去形は物語ることの本来の時制 (eigentliche Zeitform des Erzählens) である。」(Schneider, S. 212) 本章では、この W. Schneider の言葉に典型的にみられるように、「物語る」という言語（発話）行為に使用される時制という視点から過去形の意味を探ってみたい。そして、ここでの物語る行為の分析が人間の言語行為の類型論的研究の一助になればとも思っている。

はじめに、物語ることに限らず言語行為一般にとって最も基本的な時間的性質、すなわち Saussure (小林訳, S. 101) が言語記号の特質の1つとみなしたその線条的性格 (caractère linéaire) について触れておきたい。Saussure は「言語の機構はすべてこれに依存する」と述べているが、実際、音素・語・文・発話等、あらゆるレベルで言語記号は時間の流れにそって継起する性質をもつ。そのために物語る行為を考える上でも、たとえば2つの文を同時に発話することができないという事実は重要である。トーマス・マンも『魔の山』の中で、音楽と同じように「物語もやはり（造形美術の作品が一度にぱっと目にうつり、単に物体としてのみ時に結びついているのちがって）前後的に、経過的にのみ表現されるのであって、どの瞬間にも全体の姿で存在しようところみにしても、物語としてよみがえるためには、やはり時の流れを必要とするのである」(関・望月訳 (四), S. 7 f.) とこの事実を指摘している。R. Jakobson

はこうした Saussure の言語の線条性という考えを出発点として、「話し手は語を選択し、これを自分の用いる言語の統辞体系にしたがって文に結合し、文は他の文と結合されて発話となる」(川本監修, S. 23 f.) と述べているが、「物語る」こと自体が、言語主体の「選択 (selection)」と「結合 (combination)」という創造的行為を基盤としながら、1つ1つの文をすべて線条的な時間の中に組み入れている真理をまず確認しておく必要がある。

それでは「物語る」ということは具体的にはどのような言語行為を意味するのであろうか。本来 *erzählen* という動詞は、そこに *Zahl* (数) という名詞が含まれていることから推測されるように、「数え上げる (*aufzählen*)」ことを意味していた。しかし、数字を 1, 2, 3, ...,  $n$  と数え上げていくように、文を単に  $S_1, S_2, S_3, \dots, S_n$  と継起的に発話していくだけでは決して物語ることにはならない。そこで今、手元にある Klappenbach の *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache* (2. Bd., 6. Aufl., 1978) の „*erzählen*“ の項目を手懸りしてみよう。そこにはまず „*ein Geschehnis oder etwas Erdachtes ausführlich, auf unterhaltsame Weise mündlich oder schriftlich wiedergeben* (出来事あるいは虚構的な事を詳細に、おもしろく、口頭あるいは文字で再現する)“ と記述され——この他にも „*et. sagen, mitteilen* (何かを言う、伝達する)“ という意味も挙げられているが、今は最初の意味だけを問題にすればよいであろう——この意味で用いられる対格 (*Akkusativ*) 目的語として *eine Geschichte, ein Erlebnis, einen Traum* さらには *ein Märchen, lustige Dinge, Witze, Schwänke, Anekdoten* 等が示されている。しかし、ここではとりわけ物語ることが「再現する (*wiedergeben*)」ことである事実に着目してみたい。つまり、物語られることが現実的な出来事であるならば、それは物語る行為以前に生起したことであり、当然のことではあるが、物語る人 (つまり語り手) はその出来事がどのような状況で起り、その後どのような経過をたどったかすべて知っているか、あるいは知っていると確信していなければならない。たとえば「体験 (*Erlebnis*)」や「夢 (*Traum*)」は、以前現実世界あるいは眠りの世界の中で目撃し、すべてを知っている例であり、また「昔話 (*Märchen*)」のようなフィクション (つまり *etwas Erdachtes*) であっても、あたかもすべ

てを目撃し、知り尽くしているように語らなければならない。いわば、言語主体は「全知の語り手 (allwissender Erzähler)」という役割を担う必要がある。

さらに物語るという行為は、語り手が存在する Hier-Jetzt の時空とは異なる Dort-Damals の時空を形成しなければならない。そしてこうした時空の形成には何らかの語彙的あるいは文法的手段が関与している。Weinrich はこの Dort-Damals の時空を、その時間的意味を払拭して——われわれは基本的にはその必要はないと考える——「物語られた世界」と呼んでいるが、彼がその世界の典型とみなした昔話についてここで考えてみてもよいであろう<sup>5)</sup>。Weinrich 自身は昔話について次のように述べている。「昔話の世界 (Märchenwelt) もまた超時間的 (zeitlos) に物語られた世界である。いかなる物語であっても、昔話ほどわれわれを日常的状况から遠くへ連れ出してくれるものはない。昔話ではすべてのものが日常的世界 (Alltagswelt) とは異なっている。昔話は、他のいかなる物語よりもはっきりと物語られた世界と日常的世界の境界を印づける。昔話の導入と終結はふつつ型どおりのもの (formelhaft) である。」つまり、昔話の Es war einmal… (昔々) の導入と So leben sie noch heute (彼らは今なお生きているのです) が「物語られた世界」を告知するのである。そして導入部の決まり文句についても、Weinrich にとって重要なことは「この einmal (once, une fois, una vez…) がある異なる時間 (Zeit) ではなく、異なる領域 (Sphäre) である」こと (われわれはむしろ異なる時間であり、かつ異なる領域であると考えたい)、さらにこの過去形も「ここで物語られた世界が始まる」ということを意味する「1つの信号 (ein Signal)」として機能していることである (以上 Weinrich, S. 48 f., 脇阪他訳 S. 58 f. 参照)。河合隼雄氏も「昔話というのはみんな『むかし、むかし』ではじまります。それは、聞き手を時空を超えた世界へと、一挙にさそいこむ呪文のようなものなのです」(河合, S. 38) と導入部の決まり文句の心理的効用を述べている。さらにテキスト言語学を志向する Weinrich と立場は異なるが、W. Schneider も過去形について次のように述べる。「過去形は聞き手や読み手を過去の中へ——たとえそれが謎 (Dunkel) や秘密 (Geheimnis) に満ちた物語 (Geschichte) や幻想 (Phantasie) の過去であろうと——移行させる。過去形は彼らを彼らの現在か

ら取り出し、かつて (einmal) 存在した人々や状況さらには出来事の中へと感情移入 (sich einfühlen) させるのである。」(Schneider, S. 212) このように考えると、einmal や「むかしむかしあるところに」は、語り手（そして情報の受け手である聞き手や読み手）の存在する Hier-Jetzt の時空を越えた Dort-Damals の時空を形成しつつその中へ人々を心理的に移行させる語彙論的信号 (lexikalische Signale) であり、他方 war のような過去形——このような時制の他にも体験話法のような話法も含まれるであろうが——はそのことを可能にする統語論的信号 (syntaktische Signale) であると言ってよい。そしてここで一例として挙げた昔話に限らず、物語る行為は一般にこのような信号を文体的手段として所有している<sup>6)</sup>。

以上この節で述べたことをまとめると、物語る行為とは、ことばでもって——とりわけ言語記号のもつ線条的性格に依拠しつつ——すべてを知り尽くした語り手が Dort-Damals の時空、つまり (Weinrich の用語を使えば) 物語られた世界を形成し、聞き手や読み手をその中へ心理的に移行（または没入）させることである。そしてこのためには当然過去形が使用されなければならない。なぜなら、すべてを知り尽くしているということは、一般には人伝に聞くのではなく——たとえ仮定的であろうと——語り手が過去の出来事・事態を直接体験していることを意味し、聞き手・読み手を Dort-Damals の時空・世界に没入させることは、語り手自らが JETZT-ICH→DAMALS-ICH という心理的移行を果たしていることが前提となるからである。そしてこれらは前章の過去形の本質と合致する。

## 2.2. 物語る行為と過去形の意味

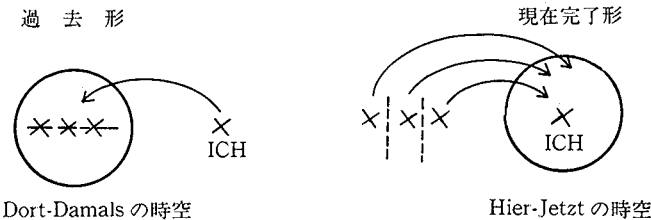
前節においては物語るという行為がもついくつかの重要な特質を挙げたが、過去形がこのような継起的な言語行為に用いられる時制として把握された場合、それはどのような表現上の価値をもつことになるであろうか。すでにその一端は目撃者が過去形を用いた場合の発話行為の仕方、すなわち〔6〕の中で示されているが、ここでは何人かの文法家による現在完了形との意味論的対比を取り上げ、過去形の文脈依存的な意味を概観してみることにしたい（これはいわ



ば前節までの議論をふまえた上での諸説の再検討であり、われわれの考えを繰り返し述べることになるが、また同時に第1・2章をまとめることになるう)。  
まず、Brinkmann の両時制についての説明を考えてみよう。

	過 去 形	現 在 完 了 形
[ 8 ]	過去形が選択されるならば、叙述される出来事は、他の出来事が先行し後続する時系列の1部分 (Glieder) として把握される (Brinkmann, S. 343, またWilmanns, S. 189 も参照)	現在完了形は、ある出来事をそれが現在に対してもつ意味のために、過去の中から孤立した事実 (isoliertes Faktum) として取り出す (Ebd.)

ここに示した Brinkmann の過去形の解釈は物語る行為を無視しては理解できない。過去形を用いて表現された個々の出来事は、Dort-Damals の時空あるいは物語られた世界の構成要素として意味をもつものに対して、現在完了形で表現される出来事は、たとえ(否、たいていは)過去のことであっても、それは過去の中ではなく現在の状況との関わりの中でのみ価値をもつ (拙論1980, S. 28 も参照)。そしてこのことを可能にさせている理由は、過去形が個々の出来事相互の関連性あるいは親和性—— Brinkmann, S. 335 はこれを „Kohärenz“ と名づけている——を生むのに対し、現在完了形は表現すべき過去の出来事を、現在における事実として、それを取りまく出来事・状況から切断してしまっているからに他ならない。今、両時制を対照させた形で図示すれば図7のようになるであろう (図5・6も参照)。



言うまでもなく、図7における ICH は現実の言語行為者そのものではなく、心理的観念的言語主体を意味している。そして図6ですでにみたように、過去

形における ICH は Dort-Damals の時空つまり物語られた世界の中にすでに移行しているために、Hier-Jetzt の時空は意識の中では完全に消失している。それに対して現在完了形の場合は、ICH にとって過去の出来事は現在における 1 つの事実として存在すればよいのであって、Hier-Jetzt の時空がありさえすればよい。

次に、Markus による両時制の規定を考えてみよう。


	過 去 形	現 在 完 了 形
[ 9 ]	文脈指示 (Kontextreferenz) (Markus, S. 75)	場面内指示機能 (Deixisfunktion) (Ebd.)

過去形が指示する文脈は「過去の文脈 (Vergangenheitskontext)」(Ebd., S. 76) である。図 7 をみてもわかるように、これは Dort-Damals の時空 (あるいは「物語られた世界」) を形成する機能をもつことと等しい。さらに時間関係についてわれわれ自身の考えを付言すれば、 $t_k < t_s$  ( $t_k$  は文脈時,  $t_s$  は発話時,  $<$  は „vor“ を意味する) はあくまで「回想」という心的態度から派生する副次的なもので、むしろ生成される時空・世界の中における  $t_{a_1} \cdot t_{a_2} \cdot t_{a_3} \cdots t_{a_n}$  ( $t_a$  は行為時) の相互の客観的時間関係がまず問題になる<sup>7)</sup>。過去形に対して、現在完了形の重要な——Markus の言葉を借りれば「支配的 (dominant)」な——機能は „Deixis“, すなわち話者と表現される出来事の間の客観的時間関係の指示であり、端的に言えば  $t_a < t_s$  の指示である<sup>8)</sup>。

ところで、この Markus の対比は拙論 (1981) の *modus/dictum* のモデルによっても確認される。過去形と現在完了形の意味論上のモデルを示すと [10] のようになる (▨ は *dictum*, つまり名詞的命題の意味内容)。

[10]	過 去 形: [ <u>ICH-ERINNERE-MICH</u> (▨)] modus dictum
	現在完了形: [ <u>ICH-STELLE-FEST</u> ( <u>VOLLZOGEN+KOPULA:JETZT/(Zukunft)</u> (▨))] modus dictum dictum'

[10] を簡単に説明すれば、過去形では、その意味の本質である下線部 (つま

り modus) が1つの時空・世界を形成する力をもつ、つまりある文脈 (Kontext) を指示できるのに対し、現在完了形においては、すべての完了時制の意味に含まれる下線部の dictum の意味でもって、dictum' で意味される出来事つまり  が発話時 JETZT (時に未来時) よりも以前であることを示す。すなわち deixisch な機能をもつのである。

最後に、W. Schneider の両時制についての見解を具体例も挙げながら説明し、この節をしめくくっておきたい。

	過 去 形	現 在 完 了 形
[11]	「どのようにということ (das Wie) を与える」 「詳細 (ausführlich) であり、個々の部分に (ins einzelne) 入って行く」 (Schneider, S. 219f., Kluge, S. 78 も参照)	「何をということ (das Was) を与える」 「的確 (bündig) であり、要約する (faßt zusammen)」 (Ebd)

これらの解釈も過去形を物語る時制として把握するならば容易に理解されるであろう。すなわち過去形は、過去の出来事・状況の様子 (つまり das Wie) を詳細に描写することによって、物語られる世界を形成していく。このことは、たとえば過去形で語られる例1のペーターの発話、例2の証人の発話が、それぞれ警部の Nun erzähl mal, wie das alles war, 裁判官の wie war das also? という言葉に対してなされていることからわかるが、ここではトーマス・マンの『魔の山』の中から用例を拾ってみた。

例 3

- »(...) Ich meine die Erschütterung, die Lissabon heimsuchte, im Jahre siebzehnhundertfünfundfünfzig.«
- »Entschuldigen Sie.«
- »Nun, Voltaire empörte sich dagegen.«
- »Das heißt...wie? Er empörte sich?«
- »Er revoltierte, ja. Er nahm das brutale Fatum und Faktum nicht hin, er weigerte sich, davor abzudanken. Er protestierte im Namen

des Geistes und der Vernunft gegen diesen skandalösen Unfug der Natur, dem drei Viertel einer blühenden Stadt und Tausende von Menschenleben zum Opfer fielen... Sie staunen? Sie lächeln? (...)»

(Mann, S. 349)

例3はセテムブリーニとハンス・カストルプの会話であり、ここでは1755年のリスボンでの地震が話題になっている。セテムブリーニはすでに Nun (下線部) の1語で現在とのつながりを断ち切り、地震が起こった当時の歴史的世界の中に没入していく。そして、さらに wie? (下線部) というハンス・カストルプの問を契機として、「反抗した」「甘受しなかった」「拒否した」「抗議した」...と互に関連しあった行為の連鎖でもって世界を構築する。つまり「物語る」行為を遂行しているのである。しかし、Sie staunen? (驚かれますか) という言葉でその行為は終結し、現在の発話状況へとひき返す。

ここで1つ付言しておきたいことは、W. Kluge も言うように、過去形の構文上の特徴が個々の部分に立ち入っていくことを可能にしているという点である(例としては例3よりもむしろ例1のペーターの言葉を参照)。彼は次のように述べる。「過去形の文はたいていの場合開かれている (offen)。つまり、述語を言った (Nennung) あとでも、文はなお任意に (beliebig) 拡張され、その開放性 (Offenheit) と可動性 (Beweglichkeit) のために後続する文に容易に移行することができる。この開放性は und dann, und dann の原則に従って連鎖形成 (Reihenbildung) をやさしくする。しかしそれは談話の脈絡 (Redezusammenhang) の助け (Unterstützung) に対する依存をも前提としている。」(Kluge, S. 76) このことは、現在完了形が述部の「二項性 (Zweigliedrigkeit)」(Ebd.) によって構文上閉じていることと比較すればいっそう明らかである。

ところで、例3の中には Voltaire という歴史的人名が現われるが、歴史的な人名・地名が過去形による歴史的世界の形成＝物語る行為と直接結びつかないことは言うまでもない。このことは同じ『魔の山』の中の次の会話を一見すれば明らかである。

## 例 4

»(...) Man kann also nicht sagen, daß Herr Settembrini den Krieg überhaupt verworfen hat. Habe ich recht, Herr Settembrini?«

»Ungefähr«, sagte der Italiener kurz, indem er abgewandten Kopfes seinen Stock schwenkte.

»Schlimm«, lächelte Naphta häßlich. »Da sind Sie von Ihrem eigenen Schüler kriegerischer Neigungen überführt. Assument pennas ut aquilae...«

»Voltaire selbst hat den Zivilisationskrieg bejaht und Friedrich dem Zweiten den Krieg gegen die Türken empfohlen.«

»Statt dessen verbündete er sich mit ihnen, he, he. Und dann die Weltrepublik! Ich unterlasse es, mich zu erkundigen, was aus dem Prinzip der Bewegung und der Rebellion wird, wenn das Glück und die Vereinigung hergestellt sind. In diesem Augenblick würde die Rebellion zum Verbrechen...«.

(Mann, S. 530)

例 4 の最初の発話は、ハンス・カストルプが必ずしもセテムブリーニが戦争に否定的でなかったことを述べたもので、その言葉に続くやりとりはセテムブリーニとナフタによるものである。例 3 では Voltaire を主語とする文の時制がすべて過去形であったのに対し、例 4 のセテムブリーニの言葉（下線部）では現在完了形が用いられている。この理由は発話のコンテキストを無視しては説明できない。つまり、例 3 では Voltaire の行為が過去の世界を構成する 1 つ (Glieder) として捉えられていたのに対し、例 4 では表現された Voltaire の行為はそれ自体で（いわばこれが W. Schneider のいう Was の視点である）発話状況において——当然話者のセテムブリーニ自らにとって——価値ある過去の事実として把握されている。端的に言えばナフタが行なった揶揄に対する言い訳としての価値である（蛇足であるが、次に続くナフタの過去形の文は冷静で、ある種皮肉な物語る態度が窺える）。

以上のことからわかるように、一般に時制の選択は、談話のコンテクストの中でその発話がどのような文体的な——あるいはもっと広く言えば、コミュニケーションにおける戦略的な——価値を必要としているかに依存している。逆に言えば、各々の時制がどのような発話状況で、どのような文体上の価値を担いえるかを分析することが時制研究にとってきわめて重要である。したがって、過去をはるかに遡る歴史的出来事かどうかとも全く問題にならない。この点次の W. Kluge の言葉は傾聴に値する。「過去時制の選択は——たとえば問 (Frage) と答え (Antwort) に対する 典型的な形式のようないくつかの例外はともかく——文法的 (grammatisches) な問題よりは、むしろ文体的 (stilistisches) な問題である。それはきわめて強く話者の態度 (Einstellung) と発話意図 (Redeabsicht) に依存すると共に、コンテクストの中で文の位置 (Stellung) にも依存している。」(Kluge, S. 80) ただわれわれは時制の場合、文法的と文体的をどこまで厳密に区別できるかには疑問をもつし、拙論 (1981) の *modus/dictum* の図式も、多少大げさに言うならば、そうした文法的側面と文体的側面を時制がもつ意味の場でいかに止揚できるかを示した拙い試みと言ってよい。

## 注

- 1) これらの意味区分の基準には簡単な注釈がついており、[1] の対立はしばしば最初の大雑把な補助説明 (Hilfserklärung) であり、[2] の対立はとりわけ比較的古い教科書 (Lehrbücher) の中に見い出せるものであり、さらに [3] [4] の対立はそれぞれ Weinrich, Baumgärtner/Wunderlich に依拠した見解であると記されている。
- 2) 本文に示した例 1・2 はともに話したことばであるが、当然書きことばでも、目撃者が過去形をもって過去の出来事を語る場合がある。次に一部示した例は、西ドイツの週刊紙 DER SPIEGEL, Nr. 52/1981 の Briefe の欄でたまたま見つけたある学校長 (Rektor einer Schule) の投書である。これは投書子が、当時社会問題化していたフランクフルトでの滑走路建設反対運動を実際に見に行き、そこで目撃・体験した出来事や、それについての感想を書き綴ったものである (この投書には——たぶん編集者によってであろうが—— „Advents-Erlebnis (降臨節の体験)“ というタイトルがつけられている)。投書は 8 パラグラフからなるが、以下 (a) 第 1 パラグラフの冒頭部、(b) 第 2 パラグラフ、(c) 第 6 パラグラフの冒頭部を (多くの部分を省略してはいるが) 紹介する。第 6・7 パラグラフだけが Weinrich のいう「論評された世界 (besprochene Welt)」で、他は「物語られた世界 (erzählte Welt)」(Weinrich, S. 21 および脇阪他訳, S. 21 参照)。また引用部 (c) は現在完了形の意味を考える上でも興味深い

(ただ文脈から考えれば, „aufgrund“ より „trotz“ の方が適当に思われるが)。引用部 (a) の中の „Briefe“ は DER SPIEGEL, Nr. 51/1981 の投書欄を指す。Nr. 48/1981 のカバーストーリーも参照のこと。

(a)

Weil ich es so nicht wahrhaben wollte, wie es im SPIEGEL unter „Briefe“ zu lesen stand, fuhr ich am 1. Adventssonntag nach Frankfurt, Startbahn-West, um mich vor Ort in friedlichster Absicht über das wahre Geschehen zu informieren. Ich konnte mir nicht vorstellen, daß ( ).

(b)

Mit Einbruch der Dunkelheit wurde ein Adventsgottesdienst vor der Betonmauer abgehalten. Danach bemerkten die sich total friedlich verhaltenden Menschen, zu denen auch ich gehörte, daß starke Polizeieinheiten militärisch perfekt sie eingekreist hatten. Uplötzlich erschienen Zivilisten, als Kopfbedeckung trugen sie Bauarbeiterhelme verschiedener Farben, aus dem nahen Waldgelände. Auch sie waren mit Schlagstöcken bewaffnet.

(c)

Ich habe aufgrund dieser bitteren Erfahrung den Glauben an unseren Rechtsstaat nicht verloren, aber ich hoffe, daß solchen „Staatsdienern“ durch verstärkten Protest und objektive Aufklärung der Bürger das Handwerk gelegt werden möge. Ich bin auch weiterhin der Hoffnung, daß alle Macht und Herrschaft an der unantastbaren Würde jedes einzelnen Menschen ihre Grenzen finden muß. ( ).

- 3) 裁判官の言葉の中で、動詞の haben だけは現在完了形を用いず過去形 hatte のままであるが、一般に sein, haben, 話法の助動詞に関しては、いかなる場合でも現在完了形よりも過去形を用いる傾向がある (Hauser-Suida/Hoppe-Beugel, S. 134, 138 参照)。
- 4) Brinkmann は未来形において、現在と未来の間に「期待の切れ目 (Erwartungsschnitt)」を想定している。しかし、かつて経験することができた過去と、まだなお来ない未来とは本質的に異なる。したがって、経験したことのある過去へは「切れ目」を飛び越えて心理的な移行を果たすことができて、まだ見ぬ未来へは不可能ではないだろうか。われわれは、未来形には本来こうした「切れ目」は不要で、心理的にも現在と同次元で扱うべきだと考える。
- 5) Weinrich によって名づけられた 2 つの世界を拙論 1980, 1981 では「論評の世界」・「物語の世界」と訳しておいたが、本稿においては „besprochen“ および „erzählt“ という過去分詞を「論評された」および「物語られた」というようにより厳密に訳出している。
- 6) 昔話は、いわば「物語る」という言語行為によって伝達される典型的な「物語られた世界」であると言えるが、一般的な小説でも、たとえばカフカが一晚で書き上げた

「判決 (Das Urteil)」の導入部をみると――

Es war an einem Sonntagvormittag im schönsten Frühjahr. Georg Bendemann, ein junger Kaufmann, saß in seinem Privatzimmer im ersten Stock eines der niedrigen, leichtgebauten Häuser, die entlang des Flusses in einer langen Reihe, fast nur in der Höhe und Färbung unterschieden, sich hinzogen. Er hatte ( ).

(Kafka, S. 26)

――昔話の Es war einmal ein König という書き出しとかなり対応しており、これもまた典型的な「物語られた世界」と呼ぶことができるであろう (小説の導入部の文体的分析も興味深いテーマではあるが、今後の課題としておきたい)。

- 7) 出来事の時間関係の表示に関しては、時間的な接続詞・前置詞・副詞あるいは過去完了形のような完了時制等、様々な言語的手段が存在するが、同時に言語の線条的性格が果たす役割も忘れてはならない。たとえば、例 1 の中の 1 文を仮に  $er \cdot ging \text{ auf den Zehen } (=E_{a1}) \cdot sah \text{ schnell nach rechts und links } (=E_{a2}) \cdot öffnete \text{ dann den Schrank } (=E_{a3}) \cdot und \cdot durchsuchte \text{ hastig jedes Fach } (=E_{a4})$  ( $E_a$  は行為の言表における表現形式) とすれば、 $er \cdot E_{a1} \cdot E_{a2} \cdot E_{a3} \cdot und \cdot E_{a4}$  となる。だが  $E_{a1} \sim_4$  を相互に入れ替えることはできない。というのも、 $er$  を主語にもつ述語  $E_{a1} \sim_4$  の発話における継起的な連鎖の順序が  $t_{a1} < t_{a2} < t_{a3} < t_{a4}$  という行為の時間的關係を規定しているからに他ならない (言うまでもなく „und“ 自体は何ら時間的關係を意味しない)。
- 8) 未来の出来事に対して用いられる現在完了形について、Markus は次のように述べている。すなわち現在完了形が表示する Deixis においては、「deixisch な指示の“零地点 (Nullpunkt)” が実際の発話時点から未来の文脈上の時点 (Kontextzeitpunkt) へと移行されえる」とし、さらに「話者の時間的な視点 (point of view) を未来へと移し、この未来の次元との関係で現在完了形を“前時性 (Vorzeitigkeit)”あるいは“完結性 (Abgeschlossenheit)”の時制として理解する可能性が、“相対的 (relativen)”な時制現在完了形という流布した考え (Vorstellung) を保証しているように思われる」と (Markus, S. 76)。この Markus の言葉からもわかるように、現在完了形を未来表現をも含めた形で定義する場合には、「前時性」・「完結性」といったより一般化したメルクマールをたてる必要があるだろう。ただ Latzel の [2] の基準でコメントしたように、「完結性」の概念については十分吟味する必要がある。

#### 引 用 文 献

- Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung, 2. Aufl., Düsseldorf 1971.
- Curme, G. O.: A Grammar of the German Language, Second Revised Edition, New York 1977.
- Hauser-Suida, U./Hoppe-Beugel, G.: Die Vergangenheitstempora in der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart. Untersuchungen an ausgewählten



Texten, München 1972 (Heutiges Deutsch I/4).

細江逸記:『動詞時制の研究(新訂版)』篠崎書林 1973.

Jakobson, R.:『一般言語学』川本茂雄監修, みすず書房 1973.

Kafka, F.: Sämtliche Erzählungen, Hrsg. von Paul Raabe, Frankfurt am Main 1970.

河合隼雄:『「モモ」の時間と「私」の時間』(『図書』第354号, 岩波書店 1979, S. 38-48).

Kluge, W.: Ich schoß auf eine Wildkatze. Über die Vergangenheitsformen im Neuhochdeutschen, in: Muttersprache 75, 1965, S. 74-84.

Latzel, S.: Die deutschen Tempora Perfekt und Präteritum. Eine Darstellung mit Bezug auf Erfordernisse des Faches «Deutsch als Fremdsprache», München 1977 (Heutiges Deutsch III/2).

Mann, Th.: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Bd. III, 2. Aufl., Frankfurt am Main 1974.

:『改訳 魔の山(一)/(四)』関・望月訳, 岩波書店(一)1961, (四)1962.

Markus, M.: Tempus und Aspekt, Zur Funktion von Präsens, Präteritum und Perfekt im Englischen und Deutschen, München 1977.

Saussure, F. de:『一般言語学講義』小林英夫訳, 岩波書店 1972.

Schneider, W.: Stilistische deutsche Grammatik, 2. Aufl., Freiburg 1957.

Weinrich, H.: Tempus. Besprochene und erzählte Welt, 3. Aufl., Stuttgart 1977.

:『時制論—文学テキストの分析—』脇阪他訳, 紀伊國屋書店 1982.

Wilmanns, W.: Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch, 1. und 2. Aufl., 3. Abt., Flexion, 1. Hälfte, Verbum, Straßburg 1906.

湯浅英男:『現在完了形におけるモドゥスの側面について—トーマス・マンの『魔の山』の例文を用いて—』(『DER KEIM』第4号, 1980, S. 20-34).

:『ドイツ語における時制意味分析試論(I)—話者の志向的な „modus“ に基づくモデルの構築—』(『香川大学一般教育研究』第20号, 1981, S. 47-72).